

平川理恵さん●留学図書館代表

オーダーメイドの留学相談を通じて、 人生の夢を育むお手伝いを

世界が非常に身近になった現代、海外へ留学する人はますます増え、留学形態も多様化の一途をたどっています。その留学情報の提供や相談を有料で行う「留学図書館」代表の平川さんは同志社大学の出身。平川さんが会社を辞めて「留学図書館」を設立した動機は何だったのでしょうか。そして、他の留学斡旋会社とは何が違うのでしょうか。留学を志す人にとって真に有益な道を共に探し続ける平川さんにお話を伺いました。



ひらかわ りえ
京都市生まれ。1991年大学文学部文化学科国文学専攻卒業。(株)リクルート入社。97年、同社の派遣留学生として南カリフォルニア大学大学院へ留学、1年でMBAを取得。99年、オーダーメイドの留学プランを紹介する留学図書館を東京・自由が丘に設立。現在も、1年の半分は現地視察のために海外へ飛ぶ。著書に『ここなら安心安全 おすすめ200校厳選マル得留学プラン』。

留学カウンセリングへの道

——留学図書館設立の動機と経緯をお聞かせください。

平川 自分のアメリカ留学経験をもとに、留学を考えている友人や知人関係の人たちの求めに応じて最初は個人的にアドバイザーをしていたんです。もともと世話焼きでしたし。でも忙しい会社勤めをしながらでは、向こうがどうしても遠慮してしまうんですね。それが申し訳なく、これを本業にしようと思った。

当時、留学斡旋業界というのは自社の提携先の学校だけを紹介して、そこから

入る手数料を取入としていたわけですが、

でもそれでは選択肢が狭まってしまいう留学斡旋業界のスクリーンがかかった学校しか行けないのはおかしいでしょ。たとえば留学可能な学校はアメリカなら3600校あるんですが、うちの場合には「どこでもいいですよ」「あなたに合った学校を選んでいただけですよ」と、公平にやりたかったんです。そこで社名にも「図書館」と付ければ、公平性が伝わるかなと考えたわけですよ。

——公平性がキーワードだったのですか。

平川 ええ。ですから場合によっては、

んです。有料であっても、その方の人生に本当に合った選択をできることが一番ですからね。最初は私一人で始めたんですが、3カ月で軌道に乗り、半年で資金を回収。人を少しずつ増やして、もともと広い場所に引越して…と歩むうちに8年目になります。

——一人ひとりのニーズや資質に合わせて的確なアドバイスをされるのは、簡単ではないでしょうね。

平川 今まで5000人くらいの方のご相談に乗ってきましたので、留学カウンセリングについては仕事をしながら学んだ形です。離婚して再出発したいという方や、車椅子で留学したいとおっしゃる方、パーキンソン氏病で右半身が動かないけど海外へ行ってみたいという方。母子留学、父子留学に夫婦留学も。最近ではシニアの方が増えて、本当にいろんな方のお世話をさせていただいています。

——半ば、人生相談のようになっていますか。

平川 「わたし何をやってほしいのかわかりません」というところから相談を受けるケースが多いんです。そういう方には、今までの職歴、特に楽しかった仕事、10年後どんな自分になりたいかななどを尋ねる中で「あなただったら、こういう形の留学がいいのでは？」とアドバイス

します。相談者も、もやもやしたものを私にぶつけるうちに話が整理されてくることが多いようです。

「人生のお手伝い」の仕事に喜び

——ご自身も現在のお仕事にいたるまでに、やはり紆余曲折を経ながら道を見つけてこられたのですか。

平川 そうですね、誰しも「これだ！」というものはすぐには見つからないと思うんですよ。私にとっては手足を動かしながらやっていくのがベストのスタイル。悩んだら、動く。答えは悩みながら見つかるものではないでしょう。子ども時代も、両親から「こうしなさい、ああしなさい」などと言われず、比較的自由に育ててもらいましたから。

実は、母と祖父は同志社大学の卒業生なんです。祖父は末包といまして、ハルビン大学で教えたあと、同志社大学商学部で教鞭をとったロシア語の教授でした。曾祖父は宣教師。それで私も幼児洗礼を受け、同志社大学で学び、いま海外の仕事をしているというのは、何かつながりを感じますね。もちろん自分自身で道を選択してきたわけですが、自分の力だけでなく、何かに導かれているという運命的なものを感じます。キリスト教と

カウンセリングの結果「あなたは留学はやめて、転職の道を考えて方がいい」と申しあげてもいいと思っています。そういう方は、何年後にお友だちを連れてきてくださったたり、「やっぱり留学したい」と言ってきたりしますから。

——有料で斡旋をすることについて、利用者が少ないのではないだろうかなど、不安はなかったのですか。

平川 もちろんありました。でも、駄目でも何とかして食べていけるだろうと思っていましたし、何より「ただ怖いものはない」ということで、私のやり方に賛同してくださる方が意外と多かった

いうものが基盤になっていくように思います。

——人のお世話をするように導かれてきたという思いはありますか。

平川 社会に出て仕事をしていくうち、自分が喜びを感じられる仕事というのが徐々にわかってきますよね。私の場合は人から「ありがとう」と感謝されることに一番喜びを感じる人間だと、30歳の頃気づきました。それなら、何か人のお世話をする仕事をしていこうと。当時、留学という「高いお金だけ納めさせられて、ひどいホームステイに行かされるんじゃないだろうか」など、どこか不安なイメージをもつ人が多かったのではと思います。そうではない留学斡旋会社を作りたいと思ったんです。

留学図書館の会員は4歳から80歳までと幅広く、50歳以上のシニアも5人に1人。そうなるに、留学情報だけではなくて日々の生活情報へのニーズも出てきます。そこで会員の方には書道家や華道の先生などいろんな先生がおられますので、会員が会員を教えるという生涯学習型のカルチャースクール「シニア図書館」も始めました。

高齢化の一方、子どもさんの国際化教育も盛んですので、英語による小学生の

ホームステイも1年生から実施しています。そうして、子どもさんたちに海外に出ることの楽しさを感じてもらえれば。子どもの留学体験は最初が肝心だと思っています。最初でつまづくと、もう二度と行かなくなる。よい形で海外デビューをさせてあげたいですね。今年の夏休みからは「ジュニア図書館」と称して、小中高生の海外留学にも力を入れる予定です。

——小さいお子さんが海外留学を経験し得ることは何でしょうか。

平川 現地の小学校や幼稚園に入ることのできるのですが、子どもは環境にすぐなじんで遊び始めるんですよ。そんな時、一緒にサッカーなどをしよつとした言葉がしゃべれず、意志の疎通ができない経験があると、中学生になってから英語の勉強をもうちょっと頑張ろうかと思えるのではないのでしょうか。そのようなモチベーションづくり、種を蒔くということですね。そういうチャンスを与えられるのは親しかいないと思います。

——シニア向けにはどのようなアドバイスをなさいますか。

平川 留学してみたいけれど少し怖いとおっしゃる方には留学体験ツアーを年2、3回行っていますので、それに参加

してみられるのも方法かと思います。留学というところには若者の話だろうとおっしゃるシニアの方がおられますが、要は2週間なり数ヶ月なり、外国に長期滞在するということ。現地で暮らしてみているかを見るのは、人生の今後にとつて非常に有意義なことだと思います。

——会員の方の、まさに人生をサポートする会社ですね。

平川 「留学図書館」は、言わば屋号ですが、社名の「トラベシア」はラテン語で「人生」という意味。ここから「トラベル」という言葉が生まれたんです。「人生は旅」ということですね。かつて勤めたリクルートも人生のターニングポイントを仕事とする会社でした。その中において、私もお客さんの人生に深く関わりたいと思うようになったんです。

一念発起してのアメリカ留学

——海外にはもともと目が向いておられたのですか。

平川 学生時代によく旅行はしましたけれど、社会人になってから、仕事で出会ったある社長さんに非常に影響を受けたんです。94年の当時は「国際化」が叫ば

れた時代。ただ、あまりに猫も杓子も「国際化、国際化」と言うので私は懐疑的になっていたのですが、その社長さんは会社の組織から何から国際化を見事に、しかも気負いなく実践されている。「こういう人になりたい」と思いました。別に経営者になりたいと思っただけではなく、こんな国際人になりたい。そしてとにかく英語の勉強を始めました。それから、とりあえず留学という方法があると思つてアメリカに飛び、空港に着いていきなりレンタカーを借りて飛び込みで各地の大学を見学。当時は向こうの人の英語なんて、わかりませんでしたけどね(笑)。

——かなり大胆だったのですか。

平川 そうでしたからね。昔は「英語はできれば避けて通りたい」と思つて国文学専攻を選んだほどですから。でも現地へ行つて、留学とはどんなものであるかを自分の目で確かめたかったです。確かめた上で、最後は直感で決めるしかないと思うんですよ。

——それから約3年間英語の勉強をされて、1年間アメリカに社費留学をなさいました。「避けて通りがかった」英語を使ってEMBA(エグゼクティブMBA)に見事合格。すごいですね。

平川 私には経済方面の知識も英語もバックグラウンドが何もなかったので、アメリカでの勉強は本当にハードでした。3回倒れて救急車で運ばれたほどです。たぶん合わなかったんですね勉強というもの(笑)。仕事だと人と人との結びつきから何かを生み出しますが、勉強は自分との闘いですべてが決まるので孤独でした。でも、帰国後に気づいて驚いたことですが、ちゃんと複眼的な視野がもてるようになっていたんですね。そう思つたら、当時はあまり意味を見出せなかった勉強でも、やつていてよかつたと思えます。大勢のクラスメートから勉強を教えてもらうなど何かと助けてもらったこともいい思い出ですし、財産です。

アメリカの大学改革にならない、同志社も「大学のファンづくり」を

——留学から帰国後はアメリカの大学経営を参考として、日本の大学に対するコンサルティング営業をされたとか。大学間競争が激化している現代、同志社大学へのご提言をいただけますか。

平川 私に申しあげられることなどありませんが、アメリカの18歳人口が減少しはじめた20年前、大学は3200校、そして少子化が進み、少なくて200校、

多くて800校が潰れると試算されていました。それが今では3600校に増えている。お先真つ暗と言われていた業界が花形産業に転換しているんです。なぜかというところアメリカの大学はこの20年間、徹底的な教員のリストラを筆頭に、ものすごく努力したんですね。学生に授業を評価させたり、地元に住む人が多いのかわるべなし。シニアの多い地域ならシニア向けの授業をいっぱい作つた。つまり、生徒に望まれる授業づくりに非常に注目して改革を断行したんです。

それと、大切なのは広報活動。私が留学していた南カリフォルニア大学にも、よく幼稚園や小学校の子どもが来ていました。つまり小さい時から大学のファンづくりをしているんです。アメリカの大学では留学生を8%以上、多いところは30%も受け入れています。同時に年配な広がりをもたせています。同時に年配の人や社会人への教育にも力を入れて垂直的な広がりをつくっている。水平・垂直の両方向へ広がる広報活動に非常に力を入れていきます。この二つを軸として、あとは生き残り策に王道はないというのが正直な思いですね。

日本の大学経営は文部科学省の認可事業という性格が強いと思いますが、アメ

リカでは自主的に改革しやすい土壌があるんです。そしてアメリカでは教授会と経営側がイコール。この二つの違いを考えると、日本での改革には難しいものがあるとは思いますが。でも子どもの数は減る一方ですから、何かをやつていかなければ。かといって個人的な意見として、奇をてらうようなことをするのはいかがなものかと。自分の子どもをそういう大学に行かせるのは不安です。あとは社会人の方にもっと大学に来てほしいですね。私も社会人になってから大学院で勉強しましたが、留学前に「向こうで一生懸命勉強したら、そのだからしない顔が変わるよ」と言われました。社会人が大学で勉強する場合は真剣さが違いますから。

——帰国後、顔つきは変わったと言われましたか？

平川 「縮まったなあ」と(笑)。かといつて最初の学生時代が無駄というわけではなく、私にとつてあれはモラトリアムとして貴重な時間でした。私を自由に過ごさせてくれた同志社大学に対して、本当にありがたかつたと思っています。

——本日はありがとうございました。

(聞き手・當村まり、11月25日東京・自由が丘「留学図書館」)

池谷 薫さん●映画監督・TVディレクター

人間に惚れる、それがドキュメンタリーの原点

『延安の娘』で文化大革命に翻弄された人々を描き、高い国際的評価を得た池谷さんが、第二次世界大戦後も中国に残留し、共産党軍との内戦を戦った元残留日本兵の姿を追った映画『蟻の兵隊』を完成されました。一般公開を前に、この作品に込めた思いや、ドキュメンタリーの魅力について伺いました。



いけや かおる
1958年東京都生まれ。82年同志社大学文学部美学及び芸術学専攻卒業後、ドキュメンタリー番組の演出を数多く手がける。主なテレビ作品に、TBS報道特集『ドラママは語る』、NHKスペシャル『西方に黄金夢あり』『黄土の民はいま』など。97年（有）運ユニバース設立。2002年に初監督した映画『延安の娘』で、カルロヴィー・ヴァリ国際映画祭最優秀ドキュメンタリー映画賞をはじめ数々の国際映画賞を受賞。『蟻の兵隊』は、今夏から順次全国で公開予定。
公式HP / <http://www.arinoheitai.com>

2005年の景色の中に見える戦争の実像を撮る

——『蟻と兵隊』が完成したそうですよね。

池谷 (インタビュ어의) 3日前に編集作業が終わったばかり。これから上映の手配にかかるそうです。

——配給も自分でされるのですか。

池谷 ええ、ドキュメンタリーは登場してもらった人への責任があるので、上映するところまで自分でやらないといけないと考えています。実は配給に携わるのは2度目なんですけど、できる

だけたくさんの人に見てもらいたいで、自主上映ではなく一般劇場で勝負したい。宣伝も自分でやるつもり。自分がつくったものだから僕が一番語れるわけですよ。

——そもそも、なぜ『蟻の兵隊』を撮ろうと思われたのですか。

池谷 『延安の娘』の上映会をすると、中国に縁を持った方がたくさん観に来られる。そんななかで、戦後も中国で、それも国民党軍として戦った日本兵がいたことを聞いたんです。残留して共産党に協力した人たちのことは知られていますが、国民党側について、しかも兵士とし

て、わが、戦犯としての責任を逃れるために

国民党との間で密約を交わし、残留画策をした。ところが、その軍司令官は東京裁判が終わったあとに帰国し、昭和31年に国会で、「兵たちは勝手に志願して残った」と証言。一軍の将が国会で証言したことだから間違いないとして、国は済ませてしまったというのです。戦後も日本兵として、武器弾薬もそのまま持つて戦った、つまり武装解除しなかったというところは明らかにポツダム宣言違反、立派な国際法違反です。だから、国としては軍が関与していたと認めるわけにはいかない。それで隠されてしまった。結局、元残留兵は「逃亡者」扱いで、もちろん軍人恩給も支給されません。はつきりいうと、国は彼らが死ぬのを待っている。それが、「逃亡者」のままでは死にきれないと、やっぱりの過去をなんとかしなければと、年齢を過ぎて事実の追求にこだわっているんです。2001年には軍人恩給を求めて提訴もしました。

——『蟻の兵隊』で何を描きたかったのですか。

池谷 実は残留問題は入り口で、本当に描きたかったのは、戦争とそれに翻弄さ

れていく人間の姿、戦争と人間です。奥

村和一という元残留兵が、国の責任を問う旅の過程で、日中戦争の頃に遡り、自分たちがやったこと、あるいはやらされたことと向き合っていく。彼らは残留問題では被害者なんだけれども、一方では加害者でもあったわけですね。旅で彼が出会った人の中には日本軍から性暴力の被害を受けたおばあさんもいます。HPにもずいぶん嫌がらせを書かれたけれど、旧日本軍の蛮行を暴きたくつくったわけではないんですよ。彼が80歳にもなると自身の戦争体験ときちんと向き合おうとしている姿を追うことで、戦争というものがいかなるものか、その本質が見えてくるのではないかと。彼は戦後60年たつても過去にこだわり続けている、そのことのすごさ。逆に言えば、戦後60年の間、一人の男を捉えて放さない戦争とは何なのか。一度兵士になったものは死ぬまでそこから逃げられない、戦争をやるならそれくらい覚悟があるんだぜ、ということなんです。もう一つは、戦争というけど、どうしても戦闘シーンを思い浮かべるけど、実は戦闘じゃないところで、より哀しいことがいっぱい起きているということ。それを若い人に知っ

てもらいたい。

——作品にナレーションも解説も入っていませんが、どんな意図があるのですか。

池谷 「分かる」より「感じて」もらいたかったから。奥村和一を撮れば奥村和一が発散するものがあります。すべては映像と彼の言葉の中にあるのだから、観る人がそのなかからどう感じるか受け取るかということが大事だと思っっている。わざわざ解説する必要はないと思うんです。だから、あえて政治的なメッセージも入れなかった。戦闘シーンなど過去の資料映像も一切入れていません。そんなものを入れても意味がないし、何にも映っていないと思うんです。それよりもいまの景色、2005年の景色の中に見える戦争を撮ることの方が重要ですから。

追いつめられた時に人間が見せるエネルギー、そのすごさは映像でしか描けない

——映像に取り組むようになったきっかけを教えてください。

池谷 大学卒業後、テレビ番組をつくるプロダクションに就職して、最初はミュージックビデオなんかをつくっていたの

ですが、ある日TBSの報道局に派遣され、アシスタントディレクターとして夕方のニュース番組を担当することになった。はじめて取材というのをしたのですが、やってみたら自分に合っていたのかな。人と会って話をするのは面白いと思つたんですね。ところが2年くらい経つと、テレビの仕事は一生やっていく仕事かなと疑問が湧いてきて、辞職してインド放浪の旅に出たんです。25歳の時でした。

そうしたら、たまたま着いて3日目に暴動が起きた。当時インドの首相だったインディラ・ガンジーがシーク寺院を焼き討ちにしたために、その報復として守衛のシーク教徒に暗殺されたのが発端です。報復の報復で、ヒンディー教徒たちがシーク教徒たちを襲い始めていました。僕が泊まっていた安宿はオーナーがシーク教徒で、焼き討ちに合う恐れがある。それで屋上上がった、どうやったら駅まで逃げられるかとそんなことを思案していて、ふつと下を見たら、子どもが店頭から商品を掠奪してパトと走って逃げてくるのが見えた。頭には鍋を被り、とにかくめいっばい持てるだけのものを持って走ってきた。ところが、右か

ら左から手が出て、だんだん剥がされていって、僕の目の前に来たときには、もうすつからかん。わーと泣き出した。そのとき、人間ってすごいものだなと感動したんです。どんな悲劇的な状況だろうが生き抜こうとする、そのエネルギーのすごさ。人間の欲望がむき出しになったようで、怖いんだけど面白い。その感動は言葉ではうまく言えないんだけど、でも映像なら伝えられるかもしれない。それで、本腰を入れて映像の仕事に取り組もうと思つたんです。

——それからすぐドキュメンタリーの仕事を始められたのですか。
池谷 いえ、最初はフィクションの映画を撮りたいと思っていました。インドから帰国したあと、今村昌平監督のもとで助監督をやるはずだったのですが、映画がなかなかクランクインしない。それでテレビの世界に戻り、フリーのディレクターに。仲間3人とテムジンというプロダクションを立ちあげてしばらくした頃、ニュース番組の取材で中国に行くことになった。新疆ウイグル自治区に取材に行つて、北京に戻ってきたらデモをやっている。これは何かあるなと感じたのですが、撮ってきたものを放送しなくて

はならず、いったん日本に帰つたんです。すぐ戻るつもりでビザも取っていたのですが、ちよつと学生が引いたので様子を見た。そうしたら6月4日に天安門事件が起こつたんです。テレビで、戦車の前に立ちふさがつてその戦車を止めた男を見て、こんな悲劇的な状況の中でこんなにも勇気をもつた人が中国にはいるのかと。インド人もすごいけれど、中国人にはまた違ったエネルギーがあると。それを天安門事件の時に強烈に感じて、中国のどくに庶民を撮りたいと思つたんですね。

——その後、十数年にわたつて中国を中心にドキュメンタリー作品を撮り続けられるわけですが、ドキュメンタリーの魅力とは何でしょうか。
池谷 それは「事実は小説より奇なり」ではないですが、ドキュメンタリーには人間のドラマが一杯詰まっているからです。『延安の娘』にしても、スクリーンに映っているのは氷山の一角で、もっともつとドラマがいっぱいあつたんですよ。そういうところに飛び込んで撮っているうちに、どんどんドキュメンタリーが面白くなつていった。人間が追い込まれていったときに見えるエネルギー、迫

力というのは、シナリオを楽に越ええますからね。

——「撮る側」と「撮られる側」の関係をどのように考えておられますか。

池谷 僕は客観視なんかとてもできない。僕の下キュメンタリーには僕の主観が入りますから。もつと言えば、撮る者と撮られる者の間にある種の共犯関係が生まれて、はじめて人間が撮れるんです。一緒に何か目標に向かっていくという気持ちになつて、撮られる人がこれは自分の映画だと意識して、主役を張るようになる。そこからですよ、僕らが勝負するのは。撮らせてもらっているうちほろくなものには撮れません。

今だからこそ、きちんと「日本」と向き合いたい

——同志社大学ではどんな学生生活を送られたのですか。

池谷 現代美術の中村敬治先生のゼミを受講していたのですが、ゼミ生は3人しかいなくて、一人はロック、一人は映像、一人は絵を描いていました。それぞれ興味を赴くままにやりました。それごとをやつて、それが許された。美学って変なところですよ。僕は本気で80年の

安保闘争があると思つていて、その日が来たらどうすべきかと、そればかり考えていた。ところが何も起こらない。世の中を知らなかつたんですね。中途半端な気持ちで、映画ばかり観てました。年間150本くらい観てたかな。仲間を集めて、作品をつくつたりもしましたよ。アルバイトをしたお金でフィルムを買つて撮影までしたのに、1本も完成しなかつた。仲間には未だに詐欺だと言われています(笑)。

——今後はどのような作品を撮つていこうと考えておられますか。

池谷 『蟻の兵隊』を撮つて、今の日本にはやらなければいけないことがたくさんあると思いましたが、戦後60年、区切りの年と言われましたが、戦後つて何にも終わっていないんだなって感じました。そればかりか、知らず知らずのうちに「いつか来た道」を再び歩き始めたようなところがある。だからこそ戦争のディテールに踏み込んで「真実」を追い求めることが大切なんだと思います。テレビゲームじゃない生身の戦争。その最後の生き証人がまだ生きているうちにね。

実は僕は被爆二世なんです。父は爆

心地から1・4キロのところで被爆しました。たまたま、出張で広島会社の寮にいて、朝飯の最中に。ところが、そのことを父はなかなか家族に話さなかつた。僕が知つたのは18歳の時でした。今ならその気持ちも少しは理解できるけど、その時は父を責めました。どうして本当のことを教えてくれなかつたんだって。だからこそ自分のことも含めて、もう一度きちんと日本と向き合いたいと思つています。

それよりも今は、『蟻の兵隊』を一人でも多くの人に観てもらいたいですね。このタイトルは「蟻のようにただ黙々と上官の命令に従つて戦つた兵士たち」という意味なんですけど、なんか今の時代にも通じるものがあると思つてますよ。今日本は憲法改定など将来を決める大事な岐路に立っている。僭越ですがこの映画を観て、それぞれの人が自分の頭と心のアンテナを張り巡らせて、この国のあり方を考えて欲しいと願っています。

(聞き手・井上陽子、11月18日東京・代々木八幡 [L. Dipper])